

魔女の巣

osi7

1 円まどかさつき彩月という子がいる。

わたしが所属している弓道部の後輩で、肩口で切りそろえた黒髪、整った小作りの顔、丁寧な言葉遣いと、絵に描いたような大和撫子だ。クラスや部の男子からはもちろん、学年を飛び越えて愛の告白を受けることが日常茶飯事という美少女である。髪も染めず、化粧もしないその飾らなさが昨今では珍しいようで、噂では、学園の裏掲示板に彼女のファンが集って生写真の画像ファイルがやりとりされているそうだから恐れ入る。なかでも入学当時、新人生代表の挨拶で壇上上がった際の初々しい姿が一級の価値を持つているそうだ。

新人生代表を務めるだけあり、成績も学年でトップクラスらしく、試験前になると他の部からも円のノートを借りに人が来るほどだ。たまにわたしのところに過去問を無心に来るが、円が必要としているわけではなく、円のところに勉強を教わりに来るクラスメイトのためというのだから、全く面倒見のいい子である。勉強の面倒の他にも、恋愛相談やめめ事の仲裁などいろいろやっているらしい。

わたしも部内ではいろいろと人からの相談を受けることが多いのでわかるのだが、女の子の悩みを聞くのは神経を使う労働である。勇気を振り絞って相談にくる子を、傷つけずに、その子の意向に沿った回答を与えてやらなければならない。そのためには何を悩んでいるのか聞き出さなければならないし、どうしたいのかも察する必要がある。そんな作業を嫌な顔をせずに何人も連続でこなすとか真似できない。

とにかく、後輩から見れば彼女は理想の先輩だし、わたしから見ればかわいい後輩である。少なくとも、彼女の趣味を知るまではわたしも彼女のことは大変買っていた。

円の唯一の欠点。彼女の趣味は『人様の隠された趣味をのぞき見る』こと。しかも好奇心を満たすためには手段を選ばない。具体的に言えば探偵のような真似をする。なぜ後輩からの相談を断らないのか、その答えだ。

人当たりのいい外面はある程度までは素なのだろうが、以前とある出来事に巻き込んでしまった時に大変狡猾な一面を発揮し、以来わたしに対してはえげつない意見もためらうことなく披露するようになった。しかも、わたしをさも共犯者のように扱い、あわよくば片棒を担がせようとするので始末が悪い。

3 まあ、そのときは彼女のしたたかな知恵も報われず、逆に一生ものの傷を負ってしまったわけだが、円本人は傷のせいで何も覚えておらず、自分に欠落があるとは露ほども知らない。ただ、円にとっては都合のよい協力者としてだけわたしの名を留めているようである。正直、わたしのこともお忘れ願ったかったが、巻き込んでしまった負い目もあり、純粹無垢な笑顔を見られると正直心が痛む。覚えていないとはいえ傷物にした分の借りは在学中になるべく返そ

うと決めていた。

その円から、朝方に呼び出しを受けた。

お屋を一緒にしないかという、それだけならなんて事のない内容である。

わざわざ高等部の昇降台で待ち伏せしていたので一応了解を伝えた。何か変なことを頼まれるような、そんな嫌な予感しかししない。

四限終了の鐘が鳴り、教室の前でお弁当を持って立ちつくすこと数分、円が迎えに来た。

中等部の制服と高等部の制服は相当違っていて目立つのだが、学園の中では見る機会も多いせいでそんなに人の目を集めることもない。円とすれ違った男子数名が思わず振り返っていたのは制服の珍しさより、やはり可愛らしいからだろうかどぼんやり考えた。

「お待たせしました」

「おなか空いた。どこで食べるの？」

「中庭でどうでしょう？」

山の中にあるこの高等部の校舎や隣の中等部の校舎よりも、さらに一段高いところに大学棟と研究棟がある。そこに挟まれた部分に庭園があつて、ベンチや噴水の他に築山まである綺麗などころだ。日もよく照つて、暖かい日だとたまに大学生が昼寝していることもあり、静かに御飯を食べるのにもってこいの場所である。

だが、お屋を誘ったくせに円は手ぶらだった。

「あなた手ぶらだけお屋はどうするの？」

にこっと笑つて円は言った。

「人に買いに行かせました」

「……誰に？」

「場所取りもお願いしておいたので、行けばわかりますよ」

ファンの中から従僕でも選び出したのだろうか？

わたしと円は昇降口で靴を履き替えて、外に出た。この靴を履き替えるというのが結構面倒だし、山を少し登る必要があるというのが、大多数の学生が中庭を避ける理由だと思う。実際歩けばわかるが、平地部分には動く歩道があるので距離はそんなに気にならない。

大学の研究棟を抜けて中庭にはいると、一番日当たりの良さそうなベンチのところに中等部の制服を着た男子がいた。茶髪で腰パンのだらしないヤンキーが、コンビニ袋を下げてだるそうにしている。

こちらに気がつくと携帯端末をポケットにつっこんで立ち上がった。

「ちつす！ あ、センパイには初めましてっすね」

見た目通り、すごく軽い。

「何コイツは？」

「羽馬はまっていいます。コイツの彼氏つきす」

従僕どころか恋人だと？ こんな軽薄な奴が？

「あり得ない」

「一応、彼氏です。一週間の試用ですが、その間だけ身の回りの面倒を見てもらっています」

「……好きなの？」

円は目をぱちくりとさせて、小首をかしげた。

「いいえ、まさか」

……円が何でもないことのように即答するが、そういう関係は世間では恋人とは認められていない。それは主従関係である。しかも一方的に労働力だけ受け取っているように見える。

「好きでもない相手は彼氏じゃないし、あんたが言ってるのはただのパシリよ。断じて彼氏じゃないわ」

「いやー、それがですねセンパイ」

羽馬が円の華奢な肩を抱き寄せようとしてするりと逃げられる。

「試用期間中に目立った不満がないようなら正式に彼氏にしてくれるっていう約束なんスよ。な？」

それは正式雇用という。なんだコイツは円の執事にでもなりたいのだろうか。

「円、そういうのは先輩としても見過ごせない。不純異性交遊よ」

「私もずっとお断りしてたんですけども、あまりにしつこかったので、私の邪魔をせず、私の望むことをしてくれるならっていう条件で、侍まじるのを許可したんです」

「経過はどうあれ、不純にかわりない」

「そうですね。先週からなんですけど、今のところ文句も言わずに色々してくれるので助かってます」

「そうぞう、そう言うことなんスから先輩は口出さないでくださいよ。これは俺とサツキの正拳突きが放たれて羽馬の言葉ことばを封じた。

円の名前を本人の前で呼ぶと悪意があるうがなからうが何らかの制裁が下される。例外はなし。

「……俺と円の約束スから」

ニッと笑ってサムズアップ。まだ初夏というのに不自然に日焼けした顔に真っ白な歯が映える。気持ちが悪いほどに。

「じゃ、これは昼飯な。俺は行くから、話し終わったらメールしろよ」

羽馬がコンビニ袋からパンを一つ取り出し、残りを袋ごと円に渡す。そして出口に向かって歩き去った。

「羽馬はいいの？」

「ええ、女の子同士の秘密の話だと言っておいたので」

秘密の話ね。これは予感的中したか。

「もう一度言っておくけど、あなたと羽馬の関係、ロクでもないよ。遅かれ早かれ危ない目に遭うから、今のうちにやめたほうがいいと思う」

円はわかつてます、と言いたげな視線をくれて、羽馬が確保していたベンチに座った。

「ですから、試用期間です。来週末には契約終了なんですよ」

あまりにあっけらかんと言う。危機感がない。

「試用期間とか思ってるのはあなただけでしょ？ 終わりって言った後に、仲間つれてあなたを囲んだらどうするの？」

徒党を組んで女の子をどうこうするようなことは無いと思うし、羽馬はそんな度胸があるタイプにも見えなかったが、円にはちよつと大げさに言っておいた方がちよつどいいだろう。

「乱暴って……。でも、ネットでも童貞がテンパって無茶するような話はよく聞きますし、来週末まで待たせたりしないで、今週末ですぱつと切った方がいいでしょうか？」

「週末まで待たたりするのも悠長。それに、振るなら放課後とかじゃなくて不意打ち気味に昼休みとかの方がいいかもね。本気っぽいし」

「うーん、でも便利なんですが」

「眉根を寄せて考えるようなことか。カラダでツケを払わされても知らないからね」

円がぎよつとした顔を向ける。生々しすぎたかもしれないが男なんてそんなものだろう。こ

の娘は痴漢に遭った経験がないのかもしれない。

円の交友関係は彼女だけのものだ。これだけ言っても続けるようならわたしの手にも余る。

それに彼氏の話をしに来たわけではないのだった。

「それで、なんの話なの？」

「はい。私のクラスの女子で倉池くらいけさんという方がいらつしやるのですが、その人が他の女子を殺そうとしたんです」

お弁当の包みを開きかけた手を止め、わたしは風に思いをはせた。

強すぎない初夏の日差しの中、学園の裏手にある山から吹き下ろす涼しげな風が、心地よく髪をなびかせていく。

「……ちよつと待って。これってどういう相談なの？」

「やっぱりびつくりしますよね」

円はかすかに小首を傾げて戯けてみせるが、そんな軽い話じゃない。

我が母校たる私立御坂学園みさかはそんなバイオレンスな学舎ではなかったはずで、当然わたしも

そんな相談をされるような役どころではない。

円は制服のスカートを指でいじりながらえへへと笑っている。なぜ笑つてられるのか不思議だが、ああそうか、探偵の出番だからか。

「そういうのは警察に任せたら？ 生徒がおもしろ半分で首を突っ込む事じゃないでしょ」

「坂木先輩も知ってるじゃないですか。前に爆発事故が起きても消防車すら来なかったんですよ？ 学園が外部に漏らすわけありません」

うっかり地獄絵図を思い出してしまつて気分が悪くなったが、お弁当を食べて表情はごまかした。

「可愛い後輩の頼みだからわたしも相談には乗つてあげたいんだけど、流石に切つた張つたの話までは面倒見きれないよ」

「まあまあ、そんなこと言わずに、お話だけ聞いて貰えませんか？ せっかくここまで来たんですし」

今日のような昼寝がしたくなるほどうらかなお天気の中で、こんな血生臭い話をしているのはわたしだけだろう。やっぱり断ればよかった。

「発端は月曜日朝、私のクラスで起こりました。

朝のホームルーム中に倉池さんがいきなりカッターナイフを抜いてクラスの女子に切りかかったんです。幸い、すぐに隣の男子に取り押さえられて誰も怪我はしませんでした、クラ

スは騒然、倉池さんは担任に生活指導室に連れていかれ、切りつけられた女子はショックで寝込みました。授業はその後も何事もなく行われましたけど、結局二人ともその日は授業には出れずに帰宅させられたそうです。

漏れ聞いた話だと、倉池さんはずっと沈黙。切りつけられた女子、天満寺さんてんまんじつて言うんですが、彼女もそんなことされる心当たりはないつて言つたそうです」

円が一気に状況を話す。練習してきたかのように淀みなく、一息で。よくまとめたものだ。それにしても、今日びの中学生は心当たりもないのに斬りかかったりするんだらうか。しかも受験生になつたばかりのこの時期に。

「そんなわけないよね」

「はい。先生がたも同じことを思つたようで、昨日も生活指導室に呼び出して事情聴取です。親も呼ばれたようですな」

円は購買で買ってきたサンドイッチの封を開き、牛乳のパックにストローを刺してぱくつと啜る。わたしはベンチに座つて膝の上にお弁当を広げ、箸を取つた。

「そんなに人が揃つてたんじゃ、ますます何も話さないんじゃない？」

「そうでしょうね。業を煮やした郷田先生の怒鳴り声が廊下まで響いてるぐらいですから」

「それはご愁傷様」

郷田とは中等部の生活指導を担当する教師だ。もう二十一世紀も終わろうかというのに旧態

然とした昭和気質を受け継ぐ体育教師で、わたしが中等部に入る以前から今に至るまで生徒の評価が大変低いことで有名である。

生徒の親を前にしても普段と同じように怒鳴りつけるとはこのご時世にして度胸が座っている。

「ただ、変な話ですが、少し前までは倉池さんと天満寺さんはすごく仲が良かったんです」

「単に喧嘩したんじゃない？」

「そうかもしれませんが、違うと思います。同じクラスですから、そんな刃傷沙汰に発展するほどの喧嘩があればすぐに噂になります。でも、他の人に聞いても倉池さんがそんなことするなんて信じられないって言うだけなんです」

「ふうん……」

さすが探偵が趣味なだけあって、すでに色々聞き込んでいるようだ。クラスメイトはさぞ迷惑がったのではないだろうか。

「倉池さんはクラスでは女子にも人気ありましたし、当然男子にもモテル人なので、私もびっくりです。クラス内によくつかグループがあるんですが、一番人気があつて人も集まるのは倉池さんのグループでした。天満寺さんも倉池さんのグループだったんですが、いつのまにか倉池さんがグループから抜けてそのかわりに天満寺さんを中心に集まるようになってたんです」

世の女子であるならばご存じであろうが、学園内には厳然としたヒエラルキーと相互監視の寄り合いのようなグループがあり、普通の女子ならそこに属していない者などいない。グループにはその中で一番人気がある者をトップとした階級制が敷かれていて、それが普段の発言力にダイレクトに影響する。また、グループ同士にも格があり、同格同士は意味もなく対立してみせたり、トップに愛想尽かした者が別のグループに移動したり、はたまた吸収したり、オブラートに包んだ劇薬を投げ合うような熾烈な争いがある。

そんな中で起きた揉め事が噂にならないわけがない。

クラスの、しかも一番人気のある人が属するグループ内でトップがすぐかわるなんてことは間違いなく大事件である。

「倉池さん、何かやらかしたんじゃない？」

「醜聞に類することは何も。最近はずっと霧上さんと一緒だったってことぐらいです」

「霧上って、うちの部の？ この前の事故で大やけどを負った？」

「はい。そうです」

「同じクラスだったんだ……」

霧上霧上がみよこ 霧上 霧世子はわたしと円が所属する弓道部の部員で、彼女の事故は高等部でも話題になっていた。

先々週の水曜日の事だが、霧上は化学準備室で清掃中に誤って酸の入った瓶をひっくり返し、大火傷を負った。肩から背中にかけて皮膚が焼け爛れていたらしい。

14 壮絶である。

「そういえば霧上のお見舞いって、うちの部のひと誰が行った？」

「いえ、状態が酷いらしいので、みんな遠慮します。見られたくないだろうって。クラスでも倉池さんだけですね。一週間ほど連日でお見舞いに行っていました」

「一人だけ？ ちよっと酷い」

「……まあ、そうですけど、霧上さんには特に親しい人がいたわけでもないの……。とりあえず霧上さんの話は置くとして」

倉池さんも天満寺さんも、他のクラスの男子からも人気はあつて、誰それが告白したって話はいく聞いてました。そのわりに誰かと付き合ひだしたって話は一度も無く、学校にいる間はほとんど二人で行動してましたね」

「それがいきなり離れて、それまでは親しくもなかった霧上と一緒にいるようになったってこと？」

「そうです。でも、親しくないとと言っても全然接点がないとかではなくて、たまに霧上さんと倉池さんが話しているのは見ていました。今月入つてからはべつたりでしたけど」

「よくわからない。倉池さんはすごくいい人なのかな」

「霧上さんが孤立してて可哀想だ、とか、そういう変な同情は見えなかったですけど……いい人なのは間違いないですね」

「話聞いた限りじゃ、カッター振り回す人には思えない……ね」

「ええ。クラスではその話で持ちきりで、二人と親しかったグループの人たちに質問攻めです」
「どんなお願いをされるかだんだん読めてきた。このまま御飯を食べて帰りたい。」

「それで、円はわたしにどうしてほしいの？」

「あの、先輩だから言うんですけど、笑わないでくださいね？」

円は辺りをばばかりるように声の調子を落としました。体をわたしに寄せて、口を耳元に近づける。

「私、今、七不思議について調べているんです」

目が点になった。予想と全く違う回答だった。

「えっと、倉池さんの話をしてたんじゃなかったっけ？」

「はい、その話にも関係してます」

「……なんでまた、そんなものを？ 学園の七不思議ってただの噂でしょ？」

「あ、やっぱり先輩も知ってるんですね」

「それはもちろん。学園に中等部から在籍してて、知らない方が無理ってものよ」

「霧上さんの話に戻るんですけども、霧上さんが酸を被ったこと、原因は七不思議にあるんじゃないかって、考えてるんです」

15 円の目は真剣だった。笑おうとした口元が中途半端に引きつる。

『「火難を与える呪い」って先輩は聞いたことありますっ。」

「ないけど……」

「私のクラスでそう言うのがあるって噂されてるんです。私はそれじゃないかと」

「でも、その呪いが原因かどうかなんてわからないでしょ？ そんな怪談めいた話を信じなくても、他にも原因になりそうなことがあると思うけど」

「調べたんです」

円はほとんどわたしと密着していて、吐息が首にかかりそうなほどの近くで囁いた。

「実際に酸の入っていた瓶も見ましたし、事故の後、片付けられる前の事故現場も見ました。その時一緒にいた人たちの話も聞きました。」

場所は化学準備室、放課後に化学室の掃除当番だった霧上さんと他数名の人たちが掃除をしていました。化学準備室のゴミ箱を回収するために、霧上さんは準備室の鍵を使って中に入ります。準備室は劇薬を保管する棚があるので出入り口は全てオートロックになっていて、中から出る際も鍵が必要です。そうして一人だけ中に入った霧上さんは、どこからか現れた酸で背中を焼きます」

円の声に当てられたのか、頬が片面だけ熱くなる錯覚を覚える。

「ちょっと、『どこからか』ってそんなわけない。酸の入った瓶は薬品棚に入っていたんでしょ？ だったら」

「いえ、違います」

円が断定した。

「棚には施錠してあります。その鍵は出入り口の鍵とは別で、職員室に保管されていました。棚の中で瓶が倒れたとしても、人の背中にかかったりしません。それとも一つ」

一呼吸おいた。わたしの喉がぐくりと音を鳴らす。

「瓶にはラベルがありませんでした」

「……ラベルが？」

「学校で管理される試薬には全てラベルが貼ってあって、いつどこでどれだけ使ったかが管理されています。ラベルのない瓶も、その中身も、由来が一切不明です」

円が一つ一つの言葉を区切って言うせいで、寒気がした。

「以上の理由から、私は七不思議を疑います」

唇がわたしから離れた。人心地がついたせいで、ため息が漏れる。

「……それでも信じられない。推理小説であるじゃない。なにか紐を使ったトリックとか、そういうのも考えられるんだから七不思議が原因とは限らないと思うけど」

円はベンチから立ち上がってわたしの前に立つ。話題の内容とは乖離した、優しいな微笑を浮かべてつぶやいた。

「そう、ですね。それならそれでいいんです」

「……でも、それと刃傷沙汰となんの関係があるの？」

18 「はい。事故の翌日から調べ始めたんですが、はじめは何もわかりませんでした。倉池さんと仲よくなる前はあまり親しい人がいなくて、クラスの中でも霧上さんの事をよく知ってる人がいなかったんです。『倉池以外に特定の親しい友達がいらない』ということが調べた結果わかって、次に呪いの話とか、呪いをかけそうな人がいないかとか、そういうことを調べようとした矢先に刃傷沙汰が起こってしまったんですね。その刃傷沙汰のせいで学年のどこをまわってもその話ばかりで、私の聞きたい話を聞けないんです」

「そう？ 学園の掲示板とかは結構霧上さんの話のほうが大きく取り上げられてるけど」

「電子掲示板は学園の検閲を受けてるじゃないですか。事故はまだしも刃傷沙汰なんて、そんな教師の責任問題になりそうなことをいつまでもオンラインに晒しておくわけはありません」

「ああ、それはそうかもね……」

「そういうことなので、興味はないんですけど、刃傷沙汰のほうに納得がいく説明をつけてしまつてから、七不思議の事を調べようと思ひまして、先輩にはその手伝いをお願いしたいんです」

人差し指を唇にあてて微笑む。

わたしは、はあ、とため息を吐いた。

「あのね、高等部のわたしが話聞いて回るとか不審すぎるでしょ。それに、クラスメイトならあなたのほうがいろいろきやすいんじゃない？ もしくは担任とか」

「もちろん、クラスメイトに話を聞くのは私ができますけど、部外者の私には絶対に漏らしたりしないです。クラスの担任は倉池さんと天満寺さんの関係を聞くアンケートをしただけで、他には何もする気ないみたいです」

円がにっこり笑う。

「それに、私、先輩が他の学生とは違つて知ってるんです」

そして、わたしに覆い被さるように顔を近づけた。のけぞってベンチの背が肩に当たる。

「先輩ってフルネームは坂木七重、ですよね？」

「……………」

「この学園の理事長と名前が同じってどういうことですか？」

「……………別にどうもしないけど」

「調べたんですけど、そんな珍しい名前の人、市内じゃ先輩しかいません」
それはそうだろうけど。

むしろ理事長の名前が非公開なのだが、どこから調べたのか聞きたい。

「……………別に隠してないし、わたしは相続しているというだけのお飾りなんですけど」

19 「お飾りでも十分です。御坂市に拠点を置く香霧グループの創業家の現当主で、学園の最高経営責任者が、先輩みたいな可愛い女子高生だなんてバシたらマスコミが放っておきませんよ？」
イヤな脅迫の仕方をしてきた。いつもならストリートに手伝えというところを、こんな変な

後押しまでするとは、ずいぶんご執心だ。

20 「別に先輩に表だって協力していただくかなくてもいいんです。ただ、いくつか私ではわからな
いことがあるので、そのときに力を借りられたらうれしいなっていうだけなんです」

ニコニコしてこんなことを言うが、そんなわけはない。どう考えたところで一から十まで手
伝わせるに決まっている。

「はいはい、わかった。協力するよ」

それでもわたしの答えは決まっていた。

「やった！ 先輩、感謝します」

わたしの手を取って跳ねる円。制服のスカートが短いのでギリギリだった。無邪気そうな笑
顔に、わたしが刻んだ消えない傷の影は見えなかった。

3

昼休みが終わって教室に戻ったら、早速円からメールが飛んできた。

机の影で携帯端末を開いて読んだが、先ほどの話を簡潔にまとめただけの内容で、目新しい
ものと言えば円なりの推論が付け足されているぐらい。

何を調べてほしいとか、そういうことは一切書いていない。『説明しなくてもわかりますよ
ね？』と言わんばかりである。

げんなりするが、とりあえず目を通すことにした。

簡条書きになっているその推論を順に読むと、『二つ目の可能性は金銭関係』。

学園の経営サイドの人間としては目を背けたくなるような内容だが、売春、ドラッグなどが
候補としてあげられており、最後に『可能性が低い』と書いてある。

学園は教育機関とはいえ、昼間は1万人近くの人間が生活しており、その何割かが墮落して
いたとしても驚くことではないし、わたしの目に入らないところで勝手にやっている分にはど
うでもいい。

だが、切りつけられた天満寺は『実家が裕福。身の回り品が舶来ものばかり。寮ではなくマ
ンションを借りて通学している』とあって、学内でお金を稼ぐ必要があったとは思えない。円
の結論は順当だ。

二つ目として書かれているのが『怨恨』。

だが、すぐに『可能性無し』と書いてある。下には、『同じクラスになって初めのうちは高
圧的な態度や仕切り屋な部分が目立ち距離を置かれていることが多かったが、倉池と一度口論
になってからは態度は軟化。倉池にフォロイーされることは多いが恨みを買うような強弁はな
くなくなった。むしろ頼られることが増えている』と一応理由が添えられている。円の印象では可能

性なしということだが、これだけだと怨恨の線があるかないか判断できない。

最後の項目は『色恋沙汰?』。

この部分には特に何も追記がなく、この項目だけが書いてある。妥当な線というか、やつとまともな理由が出てきた。中学生特有の、感情の行き違いでちょっと短絡的な行動を取ってしまうという奴だ。

端末をしまつて、授業をまじめに受けているフリをしながら、考えをノートに書き出してみる。

円は、納得がいく説明をつけたと言った。真実を知らしめたいわけじゃなくて、でつち上げでもいいから今の状況にケリをつけたいだけである。ケリをつけたからと言って霧上の事故について何か新たな情報が得られるかというところ、そんなことはあり得ないのだが、本人がそれを望んで無駄な努力をすることは別に邪魔することでもない。

円としても色恋沙汰が怪しいと睨んでいるようだし、その方向である程度事実に基づいた肉付けをしてやれば、興味本位で噂しあっている大多数は納得するに違いない。人の噂も七十五日。みんな暇を潰せる程度の話話がほしただけで本当に興味がある訳じゃない。世間話の一つであるというだけだ。

問題が色恋沙汰と言うことなら、倉池と天満寺に親しかった男子を探して吊し上げれば話は早いですが、こんな事になってしまつてからだと知っている人間も口をつぐみかねない。当事者は言うわけがないし、二人の取り巻きだったグループの女子も同様だろう。かといって、グループに属していない別のクラスメイト達に聞いたとしてもわかりそうにない。部外者がわかるような話なら円がとくに察知してるだろうから。

そうなると、誰かが倉池もしくは天満寺と逢い引きしている様子を目撃したとか、男子を取ら合っている様子を目撃したとか、そういうのがないと話が進まなくなる。

目撃者探しか……。

そんな面倒な作業はしたくない。

やっぱり、ダメ元でも倉池グループの女子に話を聞いてみるべきか。

突然グループから抜けた倉池に反感を持っている人がいれば、何か口を滑らせるかもしれない。口を滑らせたことが他に漏れないように、一人ずつこっそり呼び出してやれば口も軽くなると思う。

とはいえ、やはり高等部のわたしが呼び出しても応じるわけではないか。

いや、わたしが理事長として、取り巻きの生徒を一人ずつ呼び出して事情聴取すれば、生徒は間違いなく応じるし、円がわたしにお願いしたいことはそういうことを期待しているのだろう。内申点とかを盾に取れば間違いなく口も割る。でも、それだと望まない風評がたつことは間違いないし、わたしが理事長であることを晒したくはないので使うのは最後にしたい。

授業は退屈だ。

寝ている生徒もいても先生は注意もせずに淡々と進めていく。わたしのノートには板書ではなく、書き出した項目とマルとバツが書かかれていく。

そうだ、呼び出すときだけ理事長として呼び出して、話はわたしが聞くことにすればどうだろう？ これなら必ず呼び出せるし、変だと訝しむかもしれないけど話してくれるんじゃないだろうか。

わたしは適当に風紀委員とでも称して聞き手としての正当性を主張すればいい。

呼び出す相手も倉池グループの女子ではなく、倉池グループと仲のいい、もしくは仲の悪いグループからなら、比較的話を聞きやすいかもしれない。

そのためには、倉池と仲のよかったのは誰か、天満寺と仲がよかったのは誰か、逆に誰が仲が悪かったのか調べる必要がある。

担任教師が取ったというアンケートの中身と、担任から見えた生徒の素行を記録する学生生活表を入手できればそのあたりはわかるだろう。

それとは別に、クラスの間関係について円の影響も聞いておきたい。

端末を開く。先生の目を盗んで指を画面に滑らせ、メールを二通送信した。

一つは円に、もう一つは大学にいる知り合い宛に。

放課後になった。同じ弓道部の子に今日は部活を休むと伝えて教室を出る。

傾きかけた日の光で赤みがかった廊下は、生徒でごった返していた。

わいわい騒いで横を走り抜けていく男子を別世界の生き物のように眺める。悩みのなさそうな青春を送っていると顔を見ただけでわかる。何も考えておらず、楽しそうで、小学生ぐらいの時にはわたしにもそういう時期があった。

この学校は町から離れた山の上にあって、麓の方向である南側の窓から外を見るとなかなかいい景色が見られる。どうしてここに作ろうと思ったのか不思議なくらい急な場所で、建物は岩壁にしがみついているかのように作られており、そのおかげでどの建物からでも眺めがいい。逆に学園を麓から見ると、山の中に白い柱が林立しているようにみえて、中世のお城か何かのように見える。

実際、この学園に入学する学生は、そのお城のような景観や毎日下界を眺める貴族っぽい生活に憧れてくる人が多くて、大多数は入学して満足しているそう。

だが、わたしは外を見るのが嫌いだ。

25 世界中の人間が慣れきってしまったあの正体不明の物体が、窓の外から必ず見えるからである。

十年前にはあったが、二十年前にはなかった物。

わたしは毎晩、それがなくなってくれることを願って眠り、毎朝叶わずにいるのだ。

「今日は一段と綺麗だなー。アレ」

「よく晴れるとアレしか見えないから綺麗だよな」

窓を開いて外を眺めている生徒の声が聞こえた。

非常識な世界に慣れきってしまった世界。いや、これが新たな常識になったと言うべきだろう。ここ十数年のうちに何度『非科学的だ』と言われても、実際にそこにあるのが見えていて、誰にも否定はできない。もう、非科学的だのなんだの言う者もいなくなり、存在を否定したりはしなくなつた。

窓の外に視線を向けると、太陽の横にまるで雲か何かのように大きな塊が横たわっていた。浮遊する大陸。

墜ちれば町一つを潰せるほどの大きさの岩盤が宙に浮いて、空を覆っている景色が見えた。

大陸は単に岩の塊が空を飛んでいるわけではなく、上部には緑が茂っており、どこから湧いたのか水があつて川が流れているのが見えるそう。木々は密林にあるような何メートルも伸びる高木がほとんどで、雲と同じ高さに浮いているせいか、それとも別の理由からか、鳥やそのほかの動物が生息している様子はないらしい。

起伏に富んだ地形で上から見れば山も谷もあるように見えるそうだが、誰一人として上陸で

きた人間がいないので実際どうなのかは不明である。

そう、あれには上陸できない。

「大陸が太陽を隠すぜ!!」

風に乗っているわけでは絶対にならないが、大陸は移動することが知られている。どよめきがおきて、血を垂らしたかのような光を放つ太陽の前を大陸が通つた。

生徒が固唾を飲んで見守る中、日の光が遮られて大陸の黒々とした影だけになった。

「ほんとだ！ 影が消えない!!」

再びどよめき。

生徒達は自分の体や背後を確かめて興奮していた。

わたしたちの後ろにはまだくつきりと影が映つていて、影のない部分は大陸が太陽を隠す前と変わらない明るさを保っている。

わたしたちの目には、大陸が太陽を遮っているように見えているのに、だ。日の暖かさとも変わらず感じられる。

上陸できない理由で、各国が調査した結果、唯一判明したこと。

あの大陸は、我々人間にしか見えておらず、実体はない。

あれだけくつきり見えているのに、実体がないんだそうだ。

27
十五年前に一晚で世界中を浸食したファンタジー。決定的に常識が敗北した記念碑。

28 あんなものが世界中でいくつも空を飛んでいる。そして実害がないのもう誰も気にしない。今騒いでいた生徒達のように、普段大陸のない地域からやってきた人が観光気分で見物する程度の物だ。

全く忌々しい。

視線を外し、再び歩き出した。

わたしは円が七不思議を調べると言ったことを笑おうとしたが、本当は全く笑える話ではない。それ以上の不思議を毎朝眺めているのだから、呪いとかおまじないとか怪談まがいの七不思議など、可愛いものだ。

5

昇降口で靴を履き替え、研究棟に向かう。中庭を通り抜けると近道なのでお屋に円と歩いた道を辿った。

研究棟は遠い。

大学棟や中庭までは三階分程度を登ればすむのだが、学園の中で一番高い場所に建っている研究棟にいくとなるとそうはいかない。

研究棟の一部は岩盤を削って建ててあり、普通の男子なら頭をぶつけそうな高さしかない廊下や、岩肌をそのまま壁にしている部屋がある、とても学校施設とは思えない構造をしている。下の高等部や中等部は石造りの白い建物でごく普通の建築なのに、ここだけは石窟のような風情でとても建築とはいえない。

中庭の奥は木々が覆い茂っていて全く人の手が入っていないように見えるが、獣道のような隙間に置き石があるおかげでかろうじて道だとわかる、そんなところを通って研究棟に向かう。この道は一番の近道だが、そのぶん急勾配だ。山登りとはほとんど変わらない。

「……………」

汗がにじむ。

初夏とはいえここは山の上。半袖はまだ早く、寒がりの人ならセーターを羽織る人もいるのに、この急勾配のせいで息があがり動悸が激しくなる。

首筋を汗が伝って落ちるほど登って、やっと研究棟に到着した。自動ドアが開いて暗い館内に入る。

建物に入るとひんやりと涼しく、少しかびくさい空気が肌を冷やして鳥肌が立った。また階段を上り、名物のとても低い天井の廊下を抜けると目的地だ。

29

いい加減足が棒のようになってきた。

黒光りする年代物の木の扉に、ミスマッチな白いプラスチックの表札が三枚張り付けられて

いて、一番上が『GuestRoom』、二番目が『Inktravel』、三番目に『秋月』と油性ペンで書いてある。適当に書き殴ったような表札だ。秋月のプレートが在室をマークしている。

ノックを三回。

「いるよ」

知ってる。ドアノブをまわして重い扉を開いた。

中は暗い。窓から地平線に沈みかけた月が見えた。

「……あれ？」

もうそんな時間だったろうか、この建物に着いた時は太陽すら沈んでいなかったのに。

後ずさって廊下を見るが、この廊下には窓はない。屋外の様子を知る事は出来なかった。

奇妙な感覚が体を襲う。三半規管がキリキリと鳴った。目眩がする。

時間が自分を置いて先に進んでしまったのか、それとも夢遊病者のように意識を失った状態で長時間立ちつくしていて、部屋の前で目を覚ましたのか。

目の奥に鈍痛を感じ、足下が揺れたような気がした。

「驚いた？ いいからはいんなさいよ」

部屋の中から声があった。聞こえてから数秒して、それが自分にかげられた声だと気づいた。

窓に寄りかかった秋月が組んでいた腕を解いて、ちよいちよいと招くのが淡い月明かりに照らされて見えた。

その姿を見て、急に気分がすっきりして頭痛が消えた。

ちよつとふらつきながら、にやにやしているその女を覗んで中に入る。

「……なんなのよこれ、どういう仕掛け？」

「人つたら扉締めて。寒いから」

部屋の中は一般的な情報工学系の研究室とはかけ離れた、理科実験室のような様子をしている。耐酸性の黒い実験テーブルが何台も置かれて、上にはごちゃごちゃと実験器具や工具が散らばっていた。様々なガラクタが山を為して暗闇に沈んでおり不気味なオブジェと化している。前来たときと何も変わっていない。

テーブルの上がそんな状態なら、床も当然似たようなものだ。出入り口と秋月の作業デスク付近はそこそこ物がなくて歩きやすいようにはなっているが、右の奥の方、出入り口から遠くなればなるほど酷いことになっていく。

秋月が窓から離れて自分の椅子に座り、ぱんぱんと、旅館で仲居さんを呼ぶように手を叩いた。

「透過」

31 快晴の月夜だった窓の外の景色がブラックアウトして、外を歩いていたときよりは若干傾いだ太陽が現れた。急に明るくなったせいで視界が真っ白になる。

目が慣れると、晴れた空と大陸がよく見えて気が滅入った。

「紫外線はカットしてほしいわ」

「日に焼ける、うらなり。どうだ、環境透過ディスプレイ。面白いだろ？」

窓八枚分のディスプレイだ。きつといい値段しただろう。

「別におもしろくない。それより、入ってきたときに気分悪くなったんだけど他にも何かしてたんじゃないの？」

「は？ 別に表示を夜にただけでそのほかは何もしてないけど？ 時差ボケかも」

「そんな急性で時差ボケが起きるわけがないでしょ。月明かりまで再現されていてとても映像には見えなかつたわ」

「そうだろ。ちゃんと奥行きがあるように見せてるし、環境光のエミュレートもしてるからね」

「でもこれ、近くに寄ったりしたら変に見えるんじゃない？」

部屋に入ってきたターゲットにあわせて月の位置関係や外の建造物を設定しているなら、ターゲットが動くとおかしな見え方をするに決まっている。

「教室の隅に人の目を追いかけるセンサーがあるから、それである程度追従するよ」

すっかり対策済みだった。見上げれば窓際の天井に並んで四つ、黒い半球状の装置がついていた。人の目の位置を割り出して、映像の遠近感を調整するのだろう。

「さらに」

ばつと奥の実験テーブルを示す。

元は重機の部品らしき錆びた鉄塊や、崩れかけたレンガの壁など、結構大きな物が実験テーブルの間を塞いでいた。先ほどは暗くてよくわからなかったが、奥に入れないようになっていた。

「こうして障害物を置いて人の立ち位置を調整してやれば、見る角度を制限できるから矛盾が生じにくいってわけ」

「まるでディスプレイのために用意したみたいに言うけど、ガラクタは前からあったじゃない。

……その鉄塊とこのレンガは初めて見たけど、どこから持ってきたの？」

「適当に拾ってきた。すごく重くて車が壊れるかと思った」

にやにやして、本当に適当なことをいう。どちらも人の手で持ち上げられるような物じゃないし、ましてや乗用車に乗せられるものじゃない。どうせ専門の業者でも使ったんだろうが、産廃を引き取るなんて廃品回収業でも始めるつもりか。

秋月の横にはパソコンが置かれた机があり、わたしはそのスツールに座った。

「何拾ってきてもいいけど、床抜ける前に捨ててよ」

パソコンを起動した。休眠状態だったウィンドウマネージャが復帰して青い画面が表示される。わたしはこの学園の理事長で、理事長としてのログインアカウントを持っている。それを例えば学園内のたいいていのファイルにはアクセスできるのだが、教員用のサーバは教員用のネットワークにしか接続されておらず、たとえば、生徒用に解放されているコンピュータ室や図書室のパソコンからはアクセスできない。

そういうわけで、教員が作成したファイルに用があるときは、いつもこの部屋からアクセスしている。

秋月が椅子を寄せて横に並んだ。背もたれに頭を載せて上目遣いにこちらを見る。

この女は秋月^{あきづき}みさき。学園に雇われた教員ではない。この研究室の助教である。

客員教授として招かれているこの部屋の主はずいぶん多忙だ。秋月は、世界を飛び回って留守がちな教授に代わって、研究の進行と学生の指導を受け持っているそうだ。専攻は社会ネットワークで、有機的に変化するコミュニティに対して外部から刺激を与えたときの反応がどうか、そういうことを研究している。

そういうことになっている。

実際には何やつてるかはわたし以外に誰も知らないし、授業なんて受け持っていないし、客員教授は架空の人物で、永遠に帰ってくることはない。学園はこの部屋を提供し、給料も払っているが、それがどのように利用されているか知っているのは、わたしと秋月だけだ。

学園長のわたしがごく個人的な事情で職権を濫用した結果である。

だが、秋月がただのゴロツキかという点、そうではない。あまり公に出来ない分野で彼女は先端を行っているのは確かだ。そこでは確かに研究者といっている。

彼女は、彼女自身の謎の特技によって、重大なトラブルを抱えて八方ふさがりになったわたしのことをどうやってか嗅ぎつけ、煙のように現れた。そして事態をさっさと沈静化してしまうと、わたしに取引を持ち出したのだ。

衣食住を提供してくれるなら、用心棒を引き受けると。

まるで昔の食客である。大麥胡散臭いので早く出ていってもらいたいのが本音だが、八方ふさがりのトラブルは沈静化しただけで、今も静かに進行中であり、彼女の持つ知識と技術がないと早晚破綻する。それに、秋月には秋月なりの思惑があるようで、本当にパトロンを求めてわたしの前に現れたとは思えない。

その隠された目的のためにトラブルを起こしたのかと思っただけのこともある。しばらくして、衣食住のような、そんな肝の小さい事をするような性格じゃないとわかったので、なおさらだ。

35
契約はもうしてしまったし、今更それを反故にする気もないのだが、人の弱みにつけ込んで転がり込んだのは間違いないので、そんなヤツを全面的に信用もできないのだった。

そういうわけで、秋月はわたしより大分年上だが、敬語を使っていない。

「それで、メールに書いてあった資料調査ってなんの話？」

「円からの頼まれごと。あと、先々週の霧上関連で知らない情報出てきた」

「霧上って、事故直後に現場を押さえておいて何も出なかったのに、今更何が出てきたんだ？」

「対人関係とか」

「ああ、それは現場からは出てこないかもな。紅茶飲む？」

秋月は髪が長い。しかも染めたにしてもずいぶん明るい赤毛だ。夕焼けの中で燃えるような色になっている。

その髪と似たような色をした紅茶を、わたしの横に置いた。

「でも霧上の話は後回し」

わたしは中等部の教員が使うサーバにアクセスした。教員専用の領域だが、理事長に発行されたアクセス権を使って情報を漁る。

「何を探してるの？」

「生徒の基本情報ファイル」

「改竄でもするの？」

「しないわよ。見るだけ。……あれ？」

円のクラスに関するファイルを格納した情報にアクセスができない。なんども開こうとするかその度に拒否の表示が出る。

「なにこれ。開けない」

「それは認証ファイルだな。担任の生体認証がないと開けないタイプ」

生体認証というと、指紋とか網膜とかをスキャンするタイプだ。こればかりは本人じゃないと開けない。

「でも暗号までではないみたい」

「開ける？」

「やり方はわかる」

そういうので、試しにやらせることにした。席を譲ると、パソコンの画面を見ながら自分の携帯端末の画面に指を走らせ始めた。

「この手のファイルは認証用に余計なデータをくつつけているから、それを解除してやればいいはず……」

秋月の端末から遠隔操作されたパソコンの画面に、黒字に白の文字しかでないコンソールがいくつも表示され、目まぐるしく数字やアルファベットが流れ始めた。

手持ちぶさたに紅茶をすすっていると、ポーンとわたしの携帯端末が鳴ってメールの着信を知らせた。

差出人は円。件名はなく、いきなり本文が書かれていた。

『クラスメイトの一人が倉池さんと呼び出しました。尾行します』

簡潔な内容だ。

他人のプライバシーも何のその。普段は礼儀正しく常識も分別もあるのに、謎の行動力を発揮している。

止めても聞かないだろうから、『気をつけてね』ぐらいにしておこうかと思っただが、倉池のグループの人のリストと、円から見たクラスメイトの素行について教えるように返信した。

「おい、ナナエ。開けたよ」

秋月が黒いコンソールの一つを指さしてこちらを見ていた。

席を替わって、リストを眺めていく。

が、求めていた情報はなかった。担任のコメントなどで誰と誰が仲がよくて、誰と誰は仲が悪いか、そういう事がわかるかと思っただが、所属の組と生徒番号、部活は何をしているか、携帯端末番号や家族構成、成績などの本当に基本的な事しか書かれていなかった。

端末番号は使うかもしれないので、コンソールを操作してファイルごと携帯端末に転送した。もう一つ、調べたい事がある。

天満寺が切りつけられた後、クラスでアンケートが採られたと円は言っていた。その中身も気になる。

しばらく探すと、クラス担任の領域ではなく教頭の管理領域にあった。同じように認証ファイルのようだ。秋月に席を譲る。

「もう一つ開いてもらいたいファイルがあるんだけど」

「こっちは暗号化されてる」

「開けるでしょ？」

「まかせて」

秋月にまかせる。

わたしは自分の携帯端末を開いた。円の返信が、わたしが送信してから一分もたたずに返ってきていた。件名も本文もなく、ファイルだけが添付されている。

中身は、倉池グループに属していた人の詳細と、クラスの他グループとの関係図だった。ご丁寧に写真付きである。

倉池グループは、倉池あかり、天満寺琴乃、篠原麻美、宮川恵の四人。意外と人数はいない。仲のよいグループや取り巻きを含めるともっといるだろうが、これが中心メンバーなのだろう。写真には四人が一緒にピースをしている様子が写っていた。

倉池あかり。グループの中心。明朗快活で竹を割ったような性格。誰にでも話しかけ、すぐにうち解ける。仲のいい子には意味もなく抱きつく。茶道部副部長。写真では、緩いカールのついた髪を後ろで縛っていて満面の笑みを浮かべている。見るからに明るそうだ。

天満寺琴乃。気が強く、歯に衣着せない。非論理的で感情を優先する。始業早々に倉池とバトルしたが、仲直りをした後はずごく仲がよい。茶道部の部長。

すごく小さい。倉池に抱きつかれてちよつと眉を寄せているが、口元が笑っていてかわいい。少しクセがある長い髪をツインテールにしていた。

篠原麻美。おもしろい子。場を盛り上げたり、人のことを茶化して笑いをとる。クラスのムードメーカーのような存在。たまに限度を超えることがある。茶道部所属。髪は短く、倉池の後ろから天満寺を抱きすくめていた。仲がいいことである。活動的な印象だ。

宮川恵。クラス委員。まじめで優等生。論理的に話し、場をうまくまとめる。責任感が強いせいか、犯人探しをしたがる。茶道部所属。天満寺の横で、すこしうつむき気味にカメラを見ている。ふざけている他の三人と違って、控えめにピースをしていた。まさに円の評価通りな印象である。

これらを鵜呑みにすれば、どの子も素行が悪いようにはみえないし、倉池と天満寺が仲違いするような原因も見あたらない。部活繋がり仲良しグループだ。

他のグループとの関係図をみると、倉池はクラスの中心的存在だったと一目瞭然。つまり、彼女の意向は理屈さえ通っていけばクラス全体のそれとしてまかり通る。彼女は物事はつきりさせる性格のようなので、若干短絡的な部分もあるかもしれないが、何かを主張するのに自ら刃物を振りかざしたりするほど馬鹿じやないだろう。もつと穏便で陰険な方法を使ったほうがスマートだし、それに気づかないわけではない。

それなのに自らの手で直接対決に持ち込んだということは、人に言えない事情があったのか、助力に足る友達がいなかったのか。

これは円の推論通り、恋愛関係が原因に思える。人に言えなく、ごく個人的な解決が必要な事なんて、他に思いつかない。倉池の彼氏なのか、天満寺の彼氏なのかは知らないが、同じグループの篠原や宮川が知らないわけではないだろう。

「よし！ できた！」

秋月が歓声を上げた。

「暗号が解けたの？」

「ああ。暗号ファイルに認証をくつつけていたみたいだが、認証は無理矢理解除して、暗号はパスワード推測ソフトで総当たりで調べるだけだったよ」

「ずいぶん古典的な方法ね」

「そう、テクニクとしてもいい加減古くさいが、人間の脳はもつと古いから案外通用するんだ」

どうぞ、と秋月が横によけた。

アンケートは三つの設問があった。

一つ目は『倉池さんの行動の理由について知っていますか』。

41
これに対する回答はほとんど『知らない』で、そのほかに根拠不明の推測がいくつかあるだけだった。

二つ目は『最近の天満寺さんの行動について気がついたことがありますか』。

やはり、『特にない』が大多数で、一部の女子が『人を見下した態度をとる』『倉池さんと一緒にじゃないとすぐにつけあがる』などと書いていた。

最後は自由に記述させる設問で、ここには様々な推論が書いてあったが、円以上の推論はなかった。

倉池と天満寺にはそもそもアンケートはされておらず、二人と同じグループの篠原と宮川は、知らない、特にない、無回答と何も書いていなかった。

「すぐく中身の無いアンケート。ほとんど無回答に近い」

後ろからのぞきこんでいた秋月がつぶやいた。

「こんな意味のないアンケートを採って、満足してるんだらうか」

「採ったことに意味があるの、きつと」

努力した証拠つてことだろう。生徒同士の人間関係まで管理してられないが、問題が発生したら教師は責任を問われる。今回のことをわざわざ発表したりするわけではないが、公になったときのために、こういう予防線を張っておくのは重要だ。

円宛に、『役に立つことはない』と但し書きつきでアンケート結果のファイルを転送した。

彼女なら何か見つけるかもしれない。

基本情報のファイルは自分の端末に入れておく。あとあと、関係者を呼び出すときに使うだろう。

「で、私に不正アクセスさせてまでのぞき見たこのファイルって、何のファイル？」

「円のクラスでちょっとした事件があって、その事後のアンケート」

「円ちゃんの？　どんな事件？」

「女子が女子にカッターナイフで切りつけたって。しかもホームルーム中に」

「それはすごいな。白昼堂々クラスのみんながみている中でなんて、なかなか肝の据わったやつだ」

秋月は感心していた。この女の脳はどういう構成をしているのだろうか。

「円ちゃん、張り切ってるんじゃない？」

「そうでもないみたい」

「え、どうして。人間関係の裏側を探るのが探偵の仕事だろ」

「最近はそのちよりオカルトに食指が動いてるみたいで、これのせいで霧上の事故の調査が進まないってお冠なの」

「ふうん……」

秋月が思案顔で黙ったので、話題を変えた。

「霧上の事故の件だけど、ちょっと進展あったわ」

パソコンの画面を開いて、霧上が酸を被った事故についてのファイルを開く。

わたしは円が話したとき、まるで何も知らないかのように振る舞ったが、あの事故を察知したのはわたしが一番早かったし、その後現場を封鎖してすべて調べたのもわたしの方が早い。七不思議というのも円の言う通り。アレは間違いなく七不思議に関係があつて、それはわたしの領分で、秋月がここにいる理由でもある。

「その前に、今までにわかった事をまとめてくれ。どうだったか忘れたから」

秋月がわたしの紅茶のカップに二杯目を注ぎながら言った。

ファイルを読み上げる。

「事故発生時の状況。」

放課後、十六時頃に中等部実習棟の化学準備室で局所的な異界発生を検知した。現場に急行するとすでに生徒が多くおり、混乱状態だった。一人で化学準備室を掃除していた霧上観世子が、背中に薬品を被って重度の火傷を負ったと、同じ班で化学室の掃除をしていた女子から聞く。わたしより数分遅れで、救急隊員が霧上を搬出した。すぐに教員が化学室と化学準備室を閉鎖したので、人払いさせて一人で現場を検証する」

紅茶を一口飲んだ。ブラック。香りと苦みを感じる。

「現場検証。」

化学室側の壁にはなにも置かれておらず、逆側の壁には書類棚と薬品棚が設置。書類棚は三本、薬品棚は一本。奥の窓に近い場所には教員の机以外、何も置かれていない。窓は換気のため開かれていた。霧上の背中を流した際の水で、床は水浸しになっている。床にこぼれたはずの酸も流された後だった。

書類棚と天井の間には段ボール箱や、紙資料が詰まっていて不安定。中央の書類棚の前に書類が散乱しており、近くに小瓶が落ちていた。中身は空。小瓶にはラベルもなにもついていなかった。

薬品棚は施錠されており、当時鍵は職員室にあったことを確認。薬品棚には生徒が手を触れた形跡もなかった。

化学準備室にある出入り口は全部オートロックで、出るにも鍵が必要よ」

「密室だったわけか。それで、新しい情報っていうのは？」

「一つは、円がクラスメイトから聞き出した霧上の交友関係」

「それはちょっと私たちがわからなかったな」

45 「事故扱いされてたから生徒を問いただすような理由もなかったし、しょうがない」

秋月に、事故の前に倉池が霧上と親しくなったことを話した。

特にどうでもよいようなそんな顔をしていたので、たぶん聞き流している。わたしもまったくいぶつた割にそんな重要とも思っていないので、興味を引きそうな事実を付け足した。

「ちなみに、さっき言っていたカッター女が倉池よ」

「そうか」

軽く返された。どちらにしろそんなに興味なかったか。

「もう一つは、霧上の異界は『火難を与える呪い』って名前らしいこと」

「霧上が実際に受けた難は葉傷だけど、広義で火難か」

「学園の七不思議も数が揃ってきたね。これはいきなり行方不明になったりしないだけ他よりましかも」

「で、肝心の儀式内容は？」

「名前だけ。円のクラスでは結構メジャーな呪いみたい」

半分まで飲んで、ミルクを足した。ミルクティーのほのかな甘みがおいしい。

異界。

一般的に知られている物理法則とは異なる仕組みで動くファンタジーの事を、わたしたちはそう呼ぶ。

常時誰にでも感覚できるファンタジーとしては窓の外の巨岩が代表例だが、それとは別に、日常に潜むようにして発生するファンタジーもある。誰がいじりだしたかわからないが、特に学

園内で発生する異界については七不思議と呼ばれていて、おまじないや占いが好きな女子の間で噂として囁かれている。七不思議にはいろいろあるが、基本的に複雑な手順を踏む必要があるか、ある時間に決められた場所にいなければ発生せず、偶然に遭遇することは少ない。また、その手順であったり発生条件であったりが噂に依拠するために、その人が聞いた噂が不正確で発生しないことももちろんある。それでもやはり月に数件は本物の発生があって、世界は目に見えにくい部分から静かに狂っているのは確かだった。

わたしがカップを置くのを待って、秋月が訊いた。

「それなら円ちゃんが詳しい内容を知ってたんじゃないの？」

「あの子にはあんまり関わらせたくない」

秋月は朗らかに笑った。

「七不思議に興味あるんだろ？ いいじゃん。手伝って貰えよ」

「馬鹿言わないで。こんな外道なことを手伝わせない」

「どうせ一度はのぞいた深淵だ。再び招いたところでバチは当たらないと思うけどね」

目を細めて言って、紅茶をすすする。

気味の悪い光が暗い瞳の奥に見えた気がした。

「誰が誰に当てるバチか知らないけど、しないよ。あんたも変なちよっかいかけないでね」
「もちろんしないさ」

秋月の性格は知っている。

自分からなにかするタイプではない。相手が泥沼にはまって、手探りで藁を探しているところを見て愉しむ。頭まで沈んで呼吸困難で絶命するまで、笑顔のまま見続ける手合いだ。もし、沈んでいくのが自分の親だとしても同じように見送るに違いない。

そして、もっと愉しみたいときは自分で藁を垂らして途中で切るような事もするだろう。

こいつも片足をファンタジーにつっこんでいるのだ。

狂っていて当然である。

「でも、円ちゃんに訊かないとなると、ほかに当てはあるのか？ 儀式の内容がわからなければ儀式を行った場所がわからないし、そうなる呪った人間も探しようがない」

「当てはないけど、部の後輩は円だけじゃないし、それとなく訊いてみるわよ」

「気の長い話だ」

「別に急いでもないし」

そのとき、一瞬変な波のようなものが体を通り抜けた。

秋月が紅茶のカップから顔を上げて、呟いた。

「……最近多いな」

「感じた？」

「震源はちよつと遠いな」

「遠いね。わたしも方向ぐらいいしわからない」

秋月はカップとソーサーを机において、自分の机から電子リーダーを持ってきた。

「明日になればどこで起きたのかわかるさ。とりあえず昨日までの検知一覧。表にしておいた」
「ありがと」

表には、時系列順に位置と震度が書いてある。昨日の深夜からさかのぼって一月前までの分だ。

震度といったがこれは地震計の出力ではなく、異界発生時の空間変化を検知する機材の出力だ。わたしや秋月が異界の発生を感じる時、波のような振動に押される感覚があつて、それがあるで横方向から来る地震のように感じられるので、『震度』という表現を使っている。

位置はA・19とかG・04のようにグリッドで表されており、この学園内にくまなく設置してある秋月特製の検知器のある場所を示していた。電源のとれない屋外では太陽光や風力で発電して稼働している。

原理について一度きいたことがあるが、異界発生時に起こる金属の伝導性の変化を検知するんだそう。特殊な金属を使っているわけでもないらしいが、伝導率が平衡へ向かう特性を利用するかどうか。全く意味不明だが、一度も誤検知がないという実績があつた。

正直、こんななくても異界が発生すれば先ほど感じた波のような独特な感覚を覚えるのですぐにわかるのだが、夜間とか、学園内にいないときの監視もしたくて設置している。

「発生場所の特定をもっと高精度でやれるようにするって言うってたけど、あれはどうなったの？」

「ネットワークが細くてだめだった。情報を集計して位置を割り出すのはすぐにできるけど、肝心の情報がサーバに到達するまでに時間がかかりすぎる」

「セキュリティの有線ネットワーク、やっぱり使った方がいいんじゃない？」

「学内セキュリティのシステムは中央サーバで監視されてる。変な信号が流れてると騒がれるのはまっぴらだ。そのためにわざわざ手作業で設置してるんだぞ」

検知システムはハードウェアからソフトウェアまで秋月の手作りだ。凝り性らしく、検知情報の伝送は既設のネットワークを使用せず、検知器同士で自律的に構築されるメッシュネットワークを使っている。可能な限り小型化された検知器はそれなりに性能も低く、ネットワークの速度はインターネット黎明期と同レベルだ。設置作業ぐらいは業者に頼もうかと思っていたのだが、メッシュネットワークの有効範囲の関係と、見ず知らずの人間に触らせたくないという気分的な問題で、数日に分けて二人で設置して回るハメになった。

苦労はしたがその分効果はめざましく、七不思議のうち三つを次の週までに特定している。表を眺める。

まず一番はじめに気がつくのは、毎日午前零時に中等部の屋上付近で現れる検知記録だ。一日も欠かさず、日付変更の一瞬だけ発生している妙な七不思議である。『十三階段』と呼ばれ、そういうのがあるのは前から知っていたのだが、あまりに存在感がなくて検知をするようになって初めて気がついた。

内容は『最上階の階段が一段多いと、屋上の扉から別の世界に行ける』というもので、実際に発生するのが確かめるため深夜に秋月と張り込んだ覚えがある。

目の前で一瞬だけ階段が増えてすぐに元に戻った。あまりに一瞬過ぎて目の錯覚かと思ったので、次の日も確かめに行ったが、同じように一瞬だけ段が増えた。

その日は二人で笑いながら帰った。あんな一瞬では階段をまたいでから扉を開く余裕はない。この表にはないが、確かめようとしたが発生しなかった物もある。『憎しみの血』というのがそうだ。

それは『学園内で憎しみの血を流してはいけない。霊を引き寄せてしまい、あの世に連れ去られてしまう』というもので、試しに秋月の指を裁縫針で刺してみたがその血が床に滴ってもなにも起きなかった。意外とわたしは秋月のことが嫌いではないのかもしれないと認識した時でもある。

逆に、ミイラ取りがミイラになりそうになったこともある。

51 中等部でよく聞く七不思議で、単純に『プール』と呼ばれる物があった。『夜中に屋上からプールを見下ろすと、後ろから誰かに突き落とされる』らしい。こちらでいう屋上は階段が増える方ではなく、もう一つの別の校舎のほうである。

そちらの屋上からは、確かにプールを見下ろせる位置にはなっていた。しかし、周囲は乗り越えようがないほど高いフェンスがぐるりと囲んでいて、ここからどうやって突き落とされるのか皆目見当がつかない状態だった。

実際には突き落とされるとかいう生優しいものではなかった。

夜になってから屋上に行き、フェンスから首だけ出して下を見ると、その瞬間に異界が発生して、フェンスがプロポヨした半透明の何かに変貌していた。これでも生き物なのか、中には赤や青の線が血管のように広がっていてグロテスクさに全身が絵毛立った。

溶けかけたゼリーののような元フェンスが、わたしの首を覆おうとしたところをさっと飛び退いて、ゼリーのの一部になる事を回避した。そこまではよかったのだが、元フェンスは、柱の部分を触手のように伸ばしてきて気づいたら逃げ場がなくなっていた。階段に続く扉のほうにどうやって逃げられるか考えていたら、背後から伸びていた一本に足首を捕まれてしまう。ぬるっとした不快な感触を感じたかと思うと一息で引き倒され、そのままずると引きずられてあわやプールに投げ込まれそうになった。

コンクリートの冷たさを背中に感じながら、わたしは走馬燈代わりに夜空に浮かぶ赤い浮遊大陸を見て死の覚悟を決めたものだが、寸前で秋月が登場し、鉄パイプで触手を切断してわたしを屋上から連れ出した。出会った時と同じように煙のように現れて命を助けられたのである。「これも契約のうちだ」

食客の義務を果たしたと言わんばかりに得意顔を見せられたが、まさにその通りだったのである。そのときはばかりは素直に感謝した。

この異界は屋上だけを切り取ったように浸食するタイプのように、その後すぐに屋上をのぞいたが全く何もなかったかのような様子だった。さすがにもう一度プールを覗くような真似はしなかった。

そのかわり、翌朝には屋上とプールの改築を命じてプールは屋根付きに、屋上は屋根と壁を作って倉庫にした。物理的に異界が発生しないようにしたわけだ。これ以降、プール絡みで異界が発生したことはない。

いま見ている表では、発生時間とその場所は特定できるが、どの七不思議による異界が発生したのかはわからない。七不思議ではない異界が発生することもあるので、判別のために自分で見に行かざるを得ないのが面倒であり、この活動の危険なところでもあった。

「そういえば」

研究室の一角にあるミニキッチンで茶菓の交換をしていた秋月が、独り言のように言った。

「昨日の昼に下の食堂で、噂を聞いた」

下の食堂というのは、高等部と中等部で共用の学生食堂の事だ。大学棟や研究棟の食堂と区別して『下の』という。うちの学園は寄宿舎に入っている生徒がすごく多く、自炊していないものはそこで昼食をとることが多い。アルバイトやお小遣いが制限されている生徒のため大変

安く、大学生や研究者も釣られて来ることもある。

「わざわざ降りてきて食べたの？ そんな安い給料じゃないでしょ」

「別にケチろうとしたわけじゃなくて。午後から出るつもりで来たんだけど、お腹すかせて坂登りたくないから、ちよっと目立つけどそっちの食堂に入ったんだよ」

電気ケトルに水を足して湯沸かしモードにする。

「血のように赤い夕日の中で、実行したことがある七不思議の儀式をしてはいけない。行こうと赤い部屋に連れ去られて、魔女の奴隷にされてしまおう」

ポットに新しい茶葉を入れながら、内容を朗々と唱えてみせた。

「……奴隷つてなに？ そんな効果の曖昧な物が噂されたの？」

「さてね、新しい言葉遊びかもしれない。詳細は不明だ」

わたしの眉根が寄ったのを見て、秋月は手を広げて見せた。

ケトルからポットにお湯を注ぎ、保温カバーを掛けた。アラームを横に置いて蒸らし時間をおく。

「とりあえず、ただの噂なのか七不思議なのか、そこだけははっきりしてほしいわね」

「それはおまえの仕事だ」

その通りだった。

さて、表には異界が場所ごとについて発生したかが表示されている。この一ヶ月間にわたる記

録から、検知器の誤作動に近いような微細な反応や、毎日決まった時間に発生する『十三階段』を除くと、見るべきものは三つだけ残った。

四週間前に発生した『願いの叶う開かずの扉』と、先々週に化学準備室で発生した『火難の呪い』、あと一つは昨日の夜に発生した正体不明のもの。

『開かずの扉』は、『開かずの扉に触れて願い事を言うと、それが叶う』という如何にも中学生が考えつきそうなメルヘンチックな七不思議だ。このご時世、開かずの扉などという管理を放棄したような扉があるわけないし、そもそもこんな直球な七不思議が実在するとは思っていなかった。しかし、裏山に検知器を設置しているときに偶然どうやっても開かない扉を発見したので。

発見はしたものの、そのときはそれが件の『開かずの扉』だとは思わなかった。今にも崩れ落ちそうでカビと錆でどす黒く汚れた扉が、女の子全てが存在を望む『何でも願いの叶う』七不思議の核心だと、誰が思うだろう。あとで、もしかしたらと思ったときも、代償に何を要求されるのか、そういうことが七不思議の中で何も云われていないのが不気味で、自分では試す気にはなれなかったのだ。

検知記録で扉付近で異界の発生があった事を知るまで、その状態は続いたわけである。

秋月が時間を知らせるアラームを止めて、わたしのカップに新しいお茶を注いだ。

「その『開かずの扉』だけだ」

あごでわたしの手元を示す。

「結局、その影響って何もなかったな」

「何の願いか判らないけど、ごく個人的な範囲で使ったから周囲に影響なかった。そういうことだと思っ」

「もしかしたら観測系に現れない、時間遡及の願いだったのかもしれないぞ？」

にやにやと笑う秋月をじろりと睨んだ。

「遡及した効果は観測できないけど、その発生の検知は可能なんじゃない？ その手のタイムパドックスが生じうるものは、発生時点で新しい平行世界が構築されて、影響範囲にあるものが移されるって、そういったのはあなたよ」

「そう、そして世界は保全される。でも予想だ。あくまでもね」

紅茶の香りを愉しむようにカップを傾けていた秋月が、しれっと言った。

無責任な態度に腹が立つ。

「さらに、秋月先生の予想によれば、そもそも現状を変えたい人間が過去の変更を望むような、まどろっこしい真似はしない、とも言ってたね」

それには答えず、わたしに肩をすくめて見せた。

例の『プール』のように、開かずの扉を撤去して七不思議の実行をできなくしていないのは、狂いつつある世界の中で、この学園内だけ完全な『無菌状態』にしないようにするためだ。馬

鹿馬鹿しいほどの大きな大陸が世界中の空に浮遊している現在、異界が全く発生しないという地域のほうがイレギュラーであり、異質だ。すべての異界を排除したときに、変な『揺り戻し』が現れては困る。

この学園はわたしと秋月によって、ある程度管理された状態にある。最終的に目指すのは無菌状態なのだが、途上である現在、管理から逸脱しない範囲の異界発生なら、許容するのが今のところの方針だ。

二つ目は『火難の呪い』。これは霧上の事故なので、とりあえず今はいい。

最後の正体不明の反応が問題だった。場所も今までで初めて現れたところである。

「これって何か心当たりある？」

「位置は……えーと」

秋月がパソコンにグリッドを入力して場所を表示させた。

「寄宿舎？ 第何棟だ？」

「そこは中等部の女子寄宿舎。第四」

地図に表示された建物の形からわたしが断定した。

「中等部の女子寄宿舎なんて、心当たりなんてありませんよ」

秋月が投げやりにぼやいた。わたしが希望的観測を述べる。

「今のところ何の騒ぎにもなっていないから、そんな影響の出るものじゃなかったのかも」

「騒ぎになっていないというのは、ほとんど行方不明でことだ」

「やめてよ……。行方不明とかすぐ変な噂の温床になるんだから。面倒だけど今晚にでも調べに行くよ」

思わずため息がでる。

この学園は市街から通うとなると、バスで一時間近くかかるほど辺鄙な場所にある。麓から子供を通わせる親たちは、毎日そんな距離を通わせるより、多少目が届かなくても寄宿舎に入れた方が安上がりで楽だと判断する人が大半だ。そのせいで何棟も寄宿舎があるのだが、それぞれ学校ごとに寄宿舎は別で、基本的に部外者は舎監が睨みを効かせるロビーまでしか入れないようになっている。

それより奥に入るには、秘密の扉を抜けるか、内通者を使つて窓から入るか、舎監が施錠して眠る十時以降に鍵を開けて入るしかない。行方不明かも知れない人の部屋に内通者を通して入りたくないのも、秘密の扉か舎監の目をごまかすかしかないのだが、それはすぐ面倒な話だ。

放課後に生徒に見られる危険を冒して秘密の扉を使うか、一度家に帰つてからまた学園に来るか、それとも学園の中で十時まで暇をつぶすか、どうしようかと思ひ悩みながらパネルを操作していると、ある事に気づいた。

ちょうど表示形式を変更して、一月分の表形式から折れ線グラフに切り替えた時だ。

「……ちよつとこれ、見てよ」

「ほう、見事に右肩上がりだな」

横軸は日時、縦軸はその日で発生した震度の合計で、グラフは小刻みな上下を繰り返しながら、全体としては右上がりの直線としてプロットされていた。

「何これ」

「何もかにも、見ての通りだな」

今日何度目かわからないが、再び秋月を睨んだ。

「そうじゃなくて、これって何を意味してるのってこと」

秋月はもったいぶつた笑みを浮かべて、腕を組んだ。

「異界として検知されるよりもギリギリ低いレベルの『微震』が頻発してるってことだな」

「それって学園がだんだん異界寄りになってきたって事じゃないの？」

指を一本立てて、それから左右に振った。

「いいや。御坂市そのものが世界平均に近づきつつあるという事さ」

立てた指で、パネルをタッチした。異なる色のグラフが上に重なる。

「こっちは市内の折れ線グラフだ。見ての通り、増加の仕方がほとんど同じだ」

「市内にも検知器設置してたの？」

「別に問題ないだろ？」

秋月が謎のデバイスを市内に散布することは別に問題ない。いくつかの法律に触れている気もするが些細なことだ。それよりその態度が気になる。

「もしかして」

わたしの疑念が視線に出たのか、秋月が笑みを浮かべた。

「もちろん、このことは知ってたさ。じゃないとわざわざ市内まで手を伸ばしたりしないって」
本気で腹が立った。

「ちょっと、何で言わないのよ!」

「言ったところでおまえが気負うだけで、何の益にもならないからな」

わたしの怒気を受けても何する物ぞ、やれやれといった風に理由を述べる。そのなんでもないことのような仕事で毒気を抜かれた。

いや、むしろ馬鹿馬鹿しくなって気が抜けてきた。

「……いつから?」

「今年の初めぐらいかな」

確かに早く気づいたからといって対応策なんてないし、わたしが気負うだけというのかわかるけど、それでも教えてほしいと思う。

「気にする必要なんてない」

秋月がわたしの肩に手を置いてうそぶいた。

「ここは他の地域よりよっぽどマシだし、それに引きずられてるだけなんだからたいしたことじゃないさ」

「町の安定がわたしの仕事なの。そのモデルとなる学園さえまともに維持できてないことがわかった矢先に、そんな気休めいわないでほしい」

「そう? それは悪かったな」

ぼんぼんと肩を叩かれた。

「人の儀式によって引き起こされる異界は、味をしめた施術者によって繰り返されることが多い。そして断続的に異界が発生するようになれば、その地域の安定は大きく損なわれる。人為的な異界の発生を抑えるには、やり方を知った施術者に思い知らせてやらなければならぬ。

それはこの学園を管理するためにおまえが定めたルールだ。学園の安定が外部の影響でブレるのはしょうがないけど、ブレさせる七不思議は減らさなければならぬ」

学園を管理する上で定めたルール。濫用者を処罰し、施術者の責任を問う事。

電子リーダーには、徐々に異界化が進行することを示すグラフが表示されていた。七不思議が発生するたびに大きく突出している。

「そっね」

「安定化はおまえの趣味だし、実際にどう維持するかはおまえ次第だ」

秋月は自分のカップとソーサーを持って席に戻っていった。最後に一言を残していく。

「何をするにせよ、中途半端にするなよ」